

## 記念日のいわれ No.1 2

### カルナバル (CARNAVAL)

今年もカルナバルの季節がやってきます。この時期を心待ちにしていた方も多いのではないのでしょうか。ブラジル全土が盛り上がるカルナバル期間。ブラジルを感じる瞬間です。

ところで、どうして『カルナバル』の日が年によって変わるのでしょうか。はじめに、このことについてお話ししましょう。

『カルナバル』の日は、『パスコア：復活祭』から遡って決められるのです。ですから、まず、その年の『パスコア：復活祭』（キリスト復活を記念した祝祭日）が、春分の日の直後の満月を過ぎた最初の日曜日に決まります。そして、『パスコア：復活祭』の前の40日間（日曜日を除く）が、『四旬節』と呼ばれるキリストの40日間の断食修行を記念しての斎戒期で、この始まりの日を『クアルターフェイラ シンザス：灰の水曜日』といいます。その前日の火曜日が『カルナバル』になるのです。

つぎに、『カルナバル』の起源についてです。

前述した『四旬節』の40日間は、食肉・飲酒を謹んで心身を清める期間ですから、ヨーロッパのカトリック教国では、『灰の水曜日』の前の数日間に仮面舞踏会をはじめとする派手な酒宴を行う習慣がありました。これが『カルナバル』の起源となっていて、その語源は、ラテン語の *caro vale*（肉よ、さらば。）または、*carnem levare*（食肉禁止）にあるようです。ここブラジルには、ポルトガルから『エントゥールド』と呼ばれる謝肉祭が伝わり、これがもとになっているといわれています。16世紀頃からこの時期には、仮装した人々が、大声で歌いながら通りを歩いたり、水や粉をかけ合ったり、卵やオレンジをぶつけ合ったりしていました。ですが、あまりのエスカレートぶりに19世紀中頃には警察当局の強い取り締りの対象になり、この頃から『カルナバル』の呼び名が使われるようになったということです。ただ、この頃の『カルナバル』は、まだ、上流階級の白人中心のものでした。

では、ブラジルの『カルナバル』が今日のように世界屈指の祭典と呼ばれるようになるまでに発展したのはどうしてでしょうか。

一つは、サンバとの融合でしょう。サンバをひとことで定義づけることはできませんが、そのルーツは、アフリカからの黒人奴隷がもたらした軽快なリズムです。このアフリカの伝統音楽・土着芸能が、ヨーロッパやインディオの文化と出会い、ブラジルサンバを生み出したのです。

そして、『カルナバル』に奴隷から解放された黒人たちが参加するようになるとサンバが『カルナバル』の音楽として使われはじめ、その民衆を魅了するリズムは『カルナバル』そのものをエネルギーギッシュなパフォーマンスへと発展させてきたのです。

発展を支えたもう一つの要因は、『エスコラ・デ・サンバ』の登場とコンテスト形式の導入でしょう。『エスコラ・デ・サンバ』（サンバ学校：コミュニティーセンター的役割も持つサンバチーム）が1928年の『デイシャ・ファラール』の誕生を皮切りにリオやサンパウロには次々と誕生し、その規模を拡大していきました。また、1940年代頃から政府の民衆政策と観光局の支援を受けて現在のようなコンテスト形式が導入され、各エスコラの伝統と威信をかけたパフォーマンスが繰り広げられるようになりました。それに伴い、大きな専用会場が建設され、マスメディアの発達とともに大都市における『カルナバル』は、ショー的・観光的要素が爆発的に膨れ上がったのです。

サンパウロでも1991年に完成し、1992年に増築されたサンバ会場、通称『サンボドロモ』（33,000人収容、パレードのコース530m）で深夜から早朝まで、各エスコラのサンバパレードが行われます。みなさんの中にも観覧される方、また、参加される方がたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。



サンパウロのサンバパレード